大和田 新さん（ラジオ福島 チーフアナウンサー）

とうほく彩発見

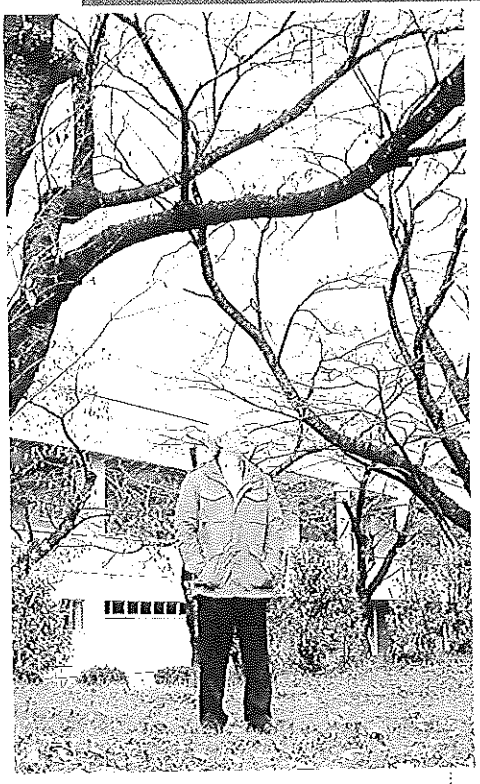
遅れた遺体の捜索活動

「原発事故がなかったら」

「東日本津波・原発大震災」から2年たった今月11日、タレントのカンニング竹山さんとTBSラジオ「Dig」のスタッフと一緒に、住民の立ち入りが制限されている警戒区域の浪江町に入った。取材のテーマは「原発事故さえ、なかったら」。

浪江町の手前にある、川俣町山木屋地区は避難区域に指定され、居住は許されない。無人の町を目の当たりにして竹山さんは「カーテンの隙間から誰かが見ているような気がする」とつぶやいた。浪江町の検問所には徳島県警の若い警察官が配属されていた。県外からの応援部隊は「ウルトラ警察隊」と呼ばれ県民から感謝されている。検問所を抜けると放射線量がこの日最大値の毎時20マイクロシーベルトを超えた。「わあ高い！」。竹山さんの声が車内に響いた。今度はすぐにトンネルに入った。放射線量は0・02マイクロシーベルトまで下がった。「1000分の1だ！」。コンクリートの放射線の遮蔽効果の高さに驚きの声が上がった。浪江町の中心部に入った。役場前は0・1マイクロシーベルト。

双葉警察署浪江分庁舎で平野敏行交通課長から、町の被害状況、4月から警戒区域が解除されたあとの問題点や、警察の取り組みなどについて聞いた。そこでは原発事故で遅れた20キロ圏内の行方不明者の捜索や、遺族への対応について貴重な話を聞くことができた。



原発事故後、いったん打ち切られた遺体捜索が始まったのは、震災から1カ月が過ぎた4月中旬になってからだった。浪江分庁舎に運ばれてくる損傷の激しいご遺体を、警察官は丁寧に洗い棺に納めた。しかし、ご遺体と対面した遺族は言う。「こんな状態じゃ、分からないだろう。お前ら今まで、いったい何をしていたんだ！」。遺族の対応にあたっていた平野さんは「申し訳ありません」と頭を下げることしかできなかった。「あの時警察官は、捜索が遅れて済みませんという気持ちで、泣きながらご遺体を棺に納めていました」と平野さんは語った。後日、平野さんたちを怒鳴りつけた遺族が「あの時は、お世話になりました」と、安置所にあいさつに来てくれた時には、涙が止まらなかったという。

福島県警ではこの震災で5人が殉職している。浪江町で最も津波被害が大きかった請戸地区にある、殉職警察官の慰霊碑を訪ねた。その日、古張文夫警部（53）は非番だった。大地震発生直後、いち早く警察署に駆けつけ、若い警察官2人を連れて沿岸部の住民の避難誘導に当たった。幹線道路は大渋滞、2人の警察官を先頭に立たせ自分は渋滞の最後尾で「車を降りて走って逃げろ」と住民に指示を出していたところを津波に襲われた。古張警部は4月15日、がれきの下から発見された。将来は、故郷の矢祭町に帰って、兄と一緒に農業をするのが夢だった。

昨年4月15日、古張警部の一周忌法要が行われた。追悼の言葉を述べた双葉警察署の今野大副署長は、「あなたは昨年の今日、この場所で発見された。大震災から1カ月余り、どんなに寒く冷たかったか。私たちはすぐにでもこの場に来て、あなたを捜したかった。しかし原発事故がそれを許さなかった」と悔しさをにじませた。

張警部は愛煙家だった。慰霊碑前で長い間手を合わせていたカンニング竹山さんは、自らのたばこに火をつけ、線香といっしょに前に手向けた。竹山さんが言った「原発事故がなかったら、もっと人間の尊厳が守れたのに」。慰霊碑から南に7キロ、原発の排気塔はくっきり見えた。

おおわだ　あらた　神奈川県横須賀市出身。1977年ラジオ福島入社。編成局専任局長・チーフアナウンサー。納豆と豆腐が大好きで、阪神タイガースをこよなく愛する。趣味はギャンブル全般とギャルズウオッチング。「大和田新のラヂオ長屋」「月曜Monday（もんだい）夜はこれから」などを担当している。

TOUHOKU SAIHAKKEN